

## 令和3年度第4回地方独立行政法人京都市立病院機構理事会 議事録（要旨）

- 日 時： 令和3年8月31日（火） 午前10時30分から12時00分まで
- 場 所： 市立病院北館7階ホール1
- 出席者： 理事長 黒田 啓史  
理 事 清水 恒広, 岡野 創造, 森 一樹, 半場 江利子, 松本 重雄,  
位高 光司, 能見 伸八郎, 山本 みどり, 白須 正  
監 事 長谷川 佐喜男  
事務局 折戸経営企画局次長, 長谷川管理担当部長, 菱田経営企画課長

### 1 開会

### 2 報告事項

#### (1) 地方独立行政法人京都市立病院機構評価委員会結果報告について

資料1に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- コロナ禍が続く中で、赤字は致し方ない面もあるが、コロナ収束後はどう黒字に持っていくかの方策を今から考えていくことが重要である。
  - コロナの影響がなかった元年度も赤字であり、赤字基調であったのは事実である。このコロナ禍を契機に、赤字体質からの脱却を検討しており、すぐに元年度の水準に戻すことは難しいが、今の時期から検討していく。
- 状況が悪い時ほど、自院の強み弱みを分析する絶好の機会である。強みは伸ばし、弱みにはそれなりの理由があるはずなので、分析して改善して欲しい。
  - コロナ禍で医業収益は落ち込んでいるが、現状を見直す良い機会と捉えている。9月1日からは、コロナ対応の強化策として病床運用を変更し、コロナ対応病床を増床する予定である。これに伴い、不足するマンパワーも一般病床の一部を休床することで確保し、対応していきたい。
- 京都市の公営企業や複数ある地方独立行政法人は、どこも決算は良くないと思う。今後をどのように考えているか。
  - また、市の赤字が続く場合、補助金を減らされるなどの影響はあるのか。
  - 病院事業は単年の収支では計りにくいため、4年単位の中期計画を策定し取り組んでおり、医療の充実や経営改善により黒字にしていきたい。次期計画は令和5年度からであり、策定が本格化する来年度には、市から出される方向性を受け、法人として経営面についてもしっかりとした計画を作っていく。
- 独法に出される運営費交付金は、政策医療等の実施に必要なものであり、補助金とは性格が異なるものと考えているが、必要額が確保されるよう市と折衝していく。
- 15年ほど前に市営地下鉄事業の収支改善に携わり、駅ナカビジネスなどの提言を行った。病院の本業は営利ではないが、他病院がされていることも参考にしながら、本業プラス「α」の部分で収益が生み出せるようなことを検討してみてはどうか。
- 医療のニーズがどこにあるか、立ち戻って検討してはどうか。2025年には団塊の世代が75歳を迎えるが、その方々が求めていることを様々な角度から検討する中で、思わぬアイデアが生まれることもある。
  - 貴重な御意見であり、参考にさせていただく。

- コロナ禍の状況はまだ1年以上続くと思う。重症者が減って軽症者が増える傾向にあるが、軽症者を受け入れると収支は違ってくるのか。
- 昨年度は、空床補償などの病床確保が国等の補償の中心であったが、今年度は実際の受入れに対して診療報酬が加算されるなど制度を変更されており、市立病院の収益に資すると考えている。
- 市立病院は主に中等症の患者を受け入れており、自宅待機者のような軽症者の受入れは想定していない。一方、重症者を多数受け入れることも設備的に難しい。  
今年度、国の補償施策は病床確保から医療中心に方向転換したと感じており、これまでどおりの受入れに取り組みれば、収支均衡も可能と考えている。

## (2) 月次収支報告（6月まで）

資料2に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 経費のうち、材料費の増加割合が医業収益に対して大きいと感じる。どのように分析しているか。
- 主に外科手術などの診療材料の費用が増加している。例えば整形外科における人工関節など、高価なものは診療報酬の点数も高いが原価も高く、費用の増加につながっている。市立病院が対象とする高度で専門的な医療を必要とする入院患者を増やしていくことが重要だと考えており、稼働率の向上に取り組んでいく。
- 京北病院の4～6月の収入増加は、ワクチン接種に取り組んだ影響によるものか。
- そのとおりで、京北地域の住民の健康を守るため、6月、7月とワクチン接種に取り組んだ結果である。今まで京北病院を受診されていなかった方も来院されており、今後の受診にもつながると期待している。  
→ 住民の方々に京北病院に愛着を持ってもらえる効果もあり、良い取組と思う。
- 報道では、コロナ禍の影響で手術ができないところもあるようだが、市立病院への影響はどうか。
- 個々の病院で事情が異なると思われる。市立病院では受診控えの影響を大きく受けており、かかりつけ医からの紹介も回復していないことから、手術を制限する状況にはなっていない。
- 厳しい時代でも一般企業を評価する視点が3つある。①研究開発費を掛けているか、②広告宣伝費を掛けているか、③採用も含め人材教育ができていくかである。病院の場合はどういう指標で評価するか、何を以て強みとしていくのかを考えてほしい。
- 厳しい状況では支出抑制を考えがちだが、職員のモチベーションは重要であり、給料カットは行いたくない。また、このような状況でも投資すべきところにはすべきである。京都には多くの大病院があり、どのように特色を出していくかが問われている。公的病院として政策医療も行う必要があり、難しい問題であるが、コロナ禍を契機として考えていかなければならない。

## (3) その他

総合情報システムの更新について、現在の公募の状況を黒田理事長から口頭で説明

## 3 閉会